

八木の太神宮灯籠

せんたい場の太神宮灯籠



移転前の太神宮灯籠

伊勢神宮に対する一般の信仰はことに近世の、初期に急速に広まり、大阪をはじめ、日本からの参拝者の通り道にあたる奈良盆地ではほとんどの垣内で伊勢講が誕生し、その中心として「太神宮さん」の灯籠が建立された。

明治に入っても皇室の租神としての伊勢信仰はますます盛んとなり、明治期の造立も少なくない。しかし特に興味深いのは「お蔭灯籠」の数々である。幾度かの熱狂的な集団参拝(お蔭参り)のうちで、明和8年(1778)、文政13年(1830)および慶応3年(1867)の「お蔭年」のものが目立ち、伊勢へ伊勢へと押掛ける人々に暖かい接待をした講中の方々の名を連ねたものなど、当時の様子が偲ばれて、まことに貴重な存在である。

中でも八木の太神宮灯籠は札の辻から西130mの三又路に建つ全高3.5mの大きな石造の灯籠で、竿の正面に「太神宮」、右面に「明和八辛卯年九月 参宮接待連中」の銘文がある。明和八年のお蔭参りのさい、道中する参宮者を接待した人々がその、記念に建てたのであろう。

土地の人々はいまもこの場所を「センタイバ」と呼んでいる。接待場を訛った言葉であり、明和の

お蔭参りの盛況と、接待の事実をよく今日に伝承している。

この灯籠は天理市萱生の菅原神社境内にあるお蔭講中一四五人が建立したものととも、大和のお蔭灯籠のうち最も古いもので、きわめて貴重な文化財である。

文化財調査会著「橿原市町文化財」から抜粋

移転された太神宮灯籠（だいじんぐうとうろう）

当時からの灯籠が最近まで遺されていましたが、危険な状態になり移転を余儀なくされました。史跡といえる「せんたい場」から江戸期のおかげ参りの歴史をものがたる太神宮灯籠が移転させられたことについては今も賛否があります。



移転後の太神宮灯籠